

不同母語背景日語學習者-*te simau* 的習得過程

簡卉雯

國立臺灣海洋大學共同教育中心副教授

摘要

本文使用日語語料庫，對比不同母語背景日語學習者日語輔助動詞-*te simau* 習得過程異同，探討說話者、動作者及動詞意志性對-*te simau* 語意使用的影響。分析結果發現，不分母語背景，學習者的正用形式集中使用於「-*te simau*」「*tyau*」的非過在式；而誤用形式集中在應該使用「*ta*」時，誤用成「-*te simau*」，並且此情形在超級程度學習者也常發生。此外，-*te simau* 的產出集中於「說話者≠動作者」的狀況明顯，並依說話者意志有無，不同母語背景學習者在-*te simau* 使用上有所差異。

關鍵詞：-*te simau*、感情評價、說話者、動作者、動詞意志性

受理日期：2019年08月22日

通過日期：2019年11月15日

The Acquisition of Japanese Subsidiary Verb - *te simau* :
From the Viewpoint of L1

Chien, Hui-Wen

Associate Professor, General Education Center,
National Taiwan Ocean University

Abstract

In this paper, using the Japanese learner's utterance corpus, we examined whether the learning process of the Japanese subsidiary verb *-te simau* and the learner's interlanguage have commonality and individuality according to the difference between the Japanese language level and the native language, and whether there is a difference in usage depending on three factors: speaker, agent, and verb volition. The results show that the Japanese learners tend to use *-te simau* as an alternative to *-ta*, and the usage of the Japanese subsidiary verb *-te simau* is influenced by the characteristic of negative emotional and evaluative meaning when the speaker did not correspond to the agent.

Keywords: *-te simau*, emotional and evaluative meaning, speaker, agent, verb volition

母語の違いから見たテシマウの習得プロセス

簡卉雯

国立台湾海洋大学共同教育中心副教授

要旨

本稿では、日本語学習者発話コーパスを用い、テシマウの習得過程と学習者の中間言語は日本語レベルと母語の違いに応じて共通性と個別性があるか、話者、動作主と前接動詞の意志性の3つにより使用状況に相違点が見られるか検討を行った。その結果、まず、正用の形に関して、「てしまう」と「ちゃう」の2つの形が非過去形で数多く使用されていることが観察された。次に、誤用の形に関して、全体的に「タ→誤用のテシマウ」に集中しており、超級に上がっても数多く残っていることが見られた。また、テシマウの産出が主に「話者≠動作主」に集中しており、感情評価的な意味はマイナスになる傾向があった。一方、母語の違う学習者の間で個別性も見られた。話者自身の意志による事態か否かにより、意志動詞と無意志動詞の使い分けが見られた。

キーワード：テシマウ、感情評価的な意味、話者、動作主、意志性

母語の違いから見たテシマウの習得プロセス

簡卉雯

国立台湾海洋大学共同教育中心副教授

1. はじめに

補助動詞テシマウには、(1) に示した「アスペクト的な意味」と「感情・評価的な意味」を表わす場合がある。「アスペクト的な意味」は、一連の動作が最後まで行われることを表わすものであり、「感情・評価的な意味」は、出現された事態が話し手にとって不都合や予測に反したことを表わすものである（高橋 1969；吉川 1973；寺村 1984；守屋 1994；金水他 2000；一色 2011；中山 2015）。テシマウの意味は文脈などにより多岐にわたるため、日本語学において重要な研究対象となっており活発に議論されている。

(1) アスペクト的な意味：遊びに行くのは、おやつを食べてしまってからにしない。

感情・評価的な意味：ボールが飛んできて窓ガラスが割れてしまった。

(梁井 2009 : 16)

日本語教育の現場では、(1) に示したテシマウの2つの意味は、初級段階で日本語教科書に導入され、文法の指導項目として取り上げられるが、上級日本語学習者でも使いこなすことができない文法項目の1つであると報告されている（丸谷他 1998；宮部 2018）。習得が困難になる要因について、先行研究では前接動詞の種類、教科書での扱い、テキストの種類、使用環境など様々な側面から行われているが（棚橋 1996；丸谷他 1998；砂川 2017；宮部 2018）、まだ明らかにされていないところが多い。本稿は日本語学習者発話コーパス「KY コーパス」を用い、テシマウの習得過程と学習者の中間言語

は日本語レベルと母語の違いに応じて共通性と個別性があるか、話者、動作主と前接動詞の意志性の3つにより使用状況に相違点が見られるかを分析し、日本語話者と比較しながら検討を行うことを目的とする。

2. 先行研究

第2 言語習得研究におけるテシマウ用法の習得に関して、棚橋(1996)はテシマウの使用状況と使用環境に焦点を当て、英語を母語とする日本語学習者によるストーリー・テリングの資料を分析し、日本語母語話者の使用と比較しながら考察を行った。考察した結果、滞日期間及び学習期間が長いほどテシマウの使用頻度と適切さが増加すること、日本語母語話者の多くが「被害の受け身」と共起させている一方、英語母語話者にその傾向は見られなかったことが報告されている。

日本語教科書でのテシマウ各用法の扱いに焦点を置き研究したものに砂川(2017)と宮部(2018)が挙げられる。砂川(2017)は、中級レベルの学習者発話データを用いたテシマウの使用状況調査を行い、母語話者の使用との比較を通じ、テシマウが初級だけの指導では不十分などところがあると指摘しており、中級以降の学習者に指導が必要なテシマウの用法と使用場面を論じている。また、宮部(2018)は日本語レベル中級・上級に相当する日本語テキスト(意見と説明を述べる文)において、テシマウがどのように用いられているかについて分析を行った。分析の結果、これらのテキストでテシマウは初級日本語教科書で学習していない意味・機能を担うものとして用いられていることが分かった。初級教科書で学習するテシマウは「完了」や「感慨」といった意味で、個別的な経験を述べる文に用いられるものである。一方、中級・上級レベルのテキストでは、テシマウは個別的な事柄ではなく、より一般的な事柄に用いられると述べている。テキスト(文章・談話)レベルの内容を理解するために、

中級以降の学習者にテシマウのテクスト的な機能を指導する必要があると指摘している。

テシマウの意味と前接動詞の意志性の関わりについて、庵他(2000)では、テシマウは基本的に動作主が意志的に行ったものであるため、前接する動詞が無意志動詞の場合は「アスペクト的な意味」を表しにくく、「感情・評価的な意味」になりやすいと述べている。意志動詞と「アスペクト的な意味」、無意志動詞と「感情評価的な意味」とは関係が深いことが示唆されている。また、金水(2004)では、テシマウが帯びる話者の感情・評価的な意味がマイナスになるかどうかは、話者自身による意志的な動作か否かに左右されうると報告されている。テシマウにマイナスの感情・評価的な意味が生じるかどうかは、話者が動作主と一致するかという点に関与することが指摘されている。

梁井(2009)はテシマウの意味機能の拡張を歴史的な観点から近世後期から現代までの口語的な資料を考察した。その結果、テシマウの意味は歴史的にアスペクトの意味からモダリティの意味が発生してきたことが確認された。また、19世紀初め頃までは話し手が動作主と一致しない場合、テシマウのマイナスの感情・評価的な意味が生じやすい。その後、話者が動作主と一致する場合にも使われるようになり、その場合に無意志動作がマイナスの感情・評価的な意味を伴いやすいことが報告されている。

このように、テシマウの習得過程において、話者、動作主と前接動詞の意志性の3つにより、テシマウの使用状況がどのように変わるかは検討の余地がある。

また、テシマウは話し言葉的な文脈の中で多く用いられており、話し言葉的表現のベースとなる会話の考察が重要であると報告されている(中山 2015)。しかしながら、テシマウの習得に関するこれまでの研究は学習者の自由発話に基づくものがまだ少ない。学習者の言語体系がどのような過程を経て形成されるかを解明するために

は、多様な方法により採取されたデータを併せて分析することが不可欠である。

以上を踏まえ、本稿では日本語学習者発話コーパス「KY コーパス」を用い、テシマウの習得過程と学習者の中間言語は日本語レベルと母語の違いに応じて共通性と個別性があるか、話者、動作主と前接動詞の意志性の3つにより使用状況に相違点が見られるかを分析し、日本語話者と比較しながら検討を行うことを目的とする。

3. 調査

3.1 データ

本稿は日本語学習者発話コーパス「KY コーパス」と日本語母語話者コーパス「インタビュー形式による日本語会話データベース（「上村コーパス」）」という2つの発話コーパスを調査に使用した。「KY コーパス」はOPI方法によりデータ収集が行われたもので、中には英語、中国語、韓国語を母語とする日本語学習者それぞれ30名（初級5名、中級10名、上級10名、超級5名）、計90名分の発話データが収録されている（鎌田 2006; 山内 2009）。一方、「KY コーパス」と同じくOPIデータである「上村コーパス」は、日本語母語話者（54名）と非母語話者（56名）計120名を対象に実施されたものである。本稿は日本語学習者の使用状況と比較するため、「KY コーパス」における各レベルの学習者の人数に合わせ、「上村コーパス」から無作為に10名の日本語母語話者の発話データのみを抽出し、対照資料として分析に使用した。

3.2 動詞の分類基準

本稿ではテシマウに前接する動詞を(2)に示した吉川（1974:73）の分類に基づき、意志動詞と無意志動詞の2種類に分類した。

- (2)1. 意志動詞は、「行こう」のような「意向形（ウの形）」で「誘いかけ」を意味し、「行け」のような「命令形」で「命令」を意味することができる。また、動作動詞の中の意志動詞

は、話し手の現在の意志を表す。

2. 無意志動詞には、以下①～⑤がある。無意志動詞の①②⑤の意向形は「推量」を表すが、③④の意向形は「推量」の他に「演技としての誘いかけ」の意味もある。

- ① 非情の動き（例：流れる）
 - ② 自然現象（ひかる）
 - ③ 人間の生理的な現象（むせる）
 - ④ 人間の心理的な現象（あきる）
 - ⑤ 可能動詞（およげる）
- （吉川 1974:73）

また、(3) の「長話する」のように、本来「長話する」だけでは意志動詞であるが、「つい」「うっかり」「なんとなく」などのような副詞が付加されることにより、文全体が無意志化して、無意志的に行われた動作となった（森山 1984; 庵 2003; 中山 2013）。本稿ではこのような動詞を無意志動詞として扱う。

- (3) 彼女の家に電話をかけると、つい長話しちゃうんだ。

（庵 2003:11）

3.3 分析手順

分析に当たって、以下の手順で分析を行った。

- 1) 「KY コーパス」からテシマウが使用された箇所、及び使用が義務的な箇所を日本語母語話者 2 人に頼んで抽出した。
- 2) テシマウの形と正用・誤用のパターンの変化を見るために、抽出されたテシマウを①正用②過剰使用③過少使用に 3 分類して、産出回数（延べ数）をレベル別に母語ごとに計算した。
- 3) 正用のテシマウの意味を「アスペクト的な意味」と「感情・評価的な意味」に分けた。
- 4) 話者自身による意志的な動作か否かとテシマウ意味の関わりを探るため、梁井（2009）の分析方法を参考し、話者が動作主と一致する「話者＝動作主」と一致しない「話者≠動作主」に分

けた上、吉川（1974）の定義により、動詞を話者自身の意志に基づく「意志動詞」と意志に基づかない「無意志動詞」に分類した。

- 5) 更に、マイナスの「感情・評価的な意味」が明らかに読み取れる場合は「-」、それ以外は「+」とした（梁井 2009：23）。その後、レベル別に母語ごとに使用数を計算しまとめた。
- 6) 上記と同じ方法で日本語母語話者のデータからテシマウを抽出し分類を行い、統制群として学習者の使用状況との比較に用いた。

4. 結果と考察

調査対象となる被験者のデータを整理した結果、「アスペクト的な意味」のみを表すテシマウの使用は見つからなかった。被験者によるテシマウの産出は合計 169 回で、全体的な使用傾向をグループ別に正用／誤用ごとにまとめると表 1 の通りである。

表 1 テシマウの全体産出回数（延べ数）

	日本語話者 (10名)	日本語学習者			合計
		英語話者 (30名)	中国語話者 (30名)	韓国語話者 (30名)	
正用	-	38	21	24	83
誤用	-	11	6	5	22
合計	64	49	27	29	169

表 1 の産出回数合計を見ると、日本語話者による産出はどのグループの学習者よりも多くて 64 回あることが分かった。また、英語話者、中国語話者と韓国語話者の産出はそれぞれ 49、27、29 回であり、3 つのグループの中で、英語話者の産出がもっとも多かったことが観察された。

本節ではテシマウの「感情・評価的な意味」について以下の 3 つ

の側面から日本語学習者と日本語母語話者の使用例を引用しながら検討していく。

- 1) 正用の形と分布からテシマウの使用特徴を検討する。
- 2) 誤用の形と分布からテシマウの使用特徴を検討する。
- 3) 話者自身による意志的な動作か否かとテシマウ意味の関わりから検討する。

4.1 正用の形と分布

表 2 は被験者によるテシマウの正用の使用状況を過去形／非過去形別に示したものである。

表 2 正用の過去形と非過去形の産出回数と比率

	日本語話者 (10名)	英語話者 (30名)	中国語話者 (30名)	韓国語話者 (30名)
非過去形	55(86%)	28(74%)	17(81%)	23(96%)
過去形	9(14%)	10(26%)	4(19%)	1(4%)
合計	64	38	21	24

※%は各グループにおけるテシマウの正用産出回数合計を母数とする比率。

表 2 に示したように、すべてのグループにおいて非過去形が多数を占めていることが見られた。その中で特に韓国語話者において、非過去形が全体の 96% を占め、過去形の使用はわずか 1 回のみであった。以上のことから、日本語学習者は非過去形を中心に使用しており、日本語話者の使用に近づいていることが分かった。しかしながら、この調査結果は砂川(2017)による調査と異なる結果になっている。砂川(2017)は国立国語研究所が構築中の「多言語母語の日本語学習者横断コーパス(I-JAS)」を用いて、その中に収録されている海外と日本国内の日本語学習者及び日本語母語話者の発話データを分析し、テシマウの使用状況を調査した。発話データはストーリーテリング、半インタビュー、ロールプレーと絵描写という 4 種

類のタスクから構成されたものである。学習者と日本語話者が使用したテシマウの過去形と非過去形の分布を分析した結果、母語話者は非過去形が71%と多数を占めているのに対して、学習者はどのグループにも過去形のほうが多数を占めている点が母語話者と大きく異なっていることが報告されている。砂川(2017)では上述した4種類の発話を資料としているのに対し、本調査では自然発話資料であるOPIデータを分析しているため、タスクの違いがテシマウの過去形と非過去形の分布に影響しているのではないかと思われる。

次に、テシマウの非過去形がどのような形式で用いられているかについて、母語別に日本語レベルごとに図1～図3¹のようにまとめた。各グループ(日本語話者、英語話者、中国語話者、韓国語話者)において、産出回数合計2回以下のテシマウの形式を「その他²」に入れた。

図1～図3から次の使用特徴が観察された。まず、日本語母語話者の使用は主に「てしまう」に集中しており、27回あり、非過去形全体の49%を占めている。次いで「ちゃう」、「てしまっ」、「られてしまう」の順になり、これらの4種類の形で全体の89%を占めていることが見られた。

¹ 図1～図3の中、「ちゃう」は「ちゃう」または「ちゃいます」、「てしまう」は「てしまう」または「てしまいます」、「てしまっ」は「てしまっ」または「てしままして」という形である。

² 各グループにおける産出回数合計2回以下のテシマウ非過去形の形は以下の通りである。日本語話者10名中:「ちゃって(1回)」「ちゃったり(1回)」「ちゃってる(1回)」「てしまおう(2回)」「てしまったり(1回)」。英語話者30名中:「ちゃてる(1回)」「てしまってる(2回)」。中国語話者30名中:「ちゃたら(1回)」、「しまったら(2回)」「てしまってる(1回)」。韓国語話者30名の中:「てしまえば(1回)」「ちゃって(2回)」「しまったり(1回)」「られちゃう(1回)」である。

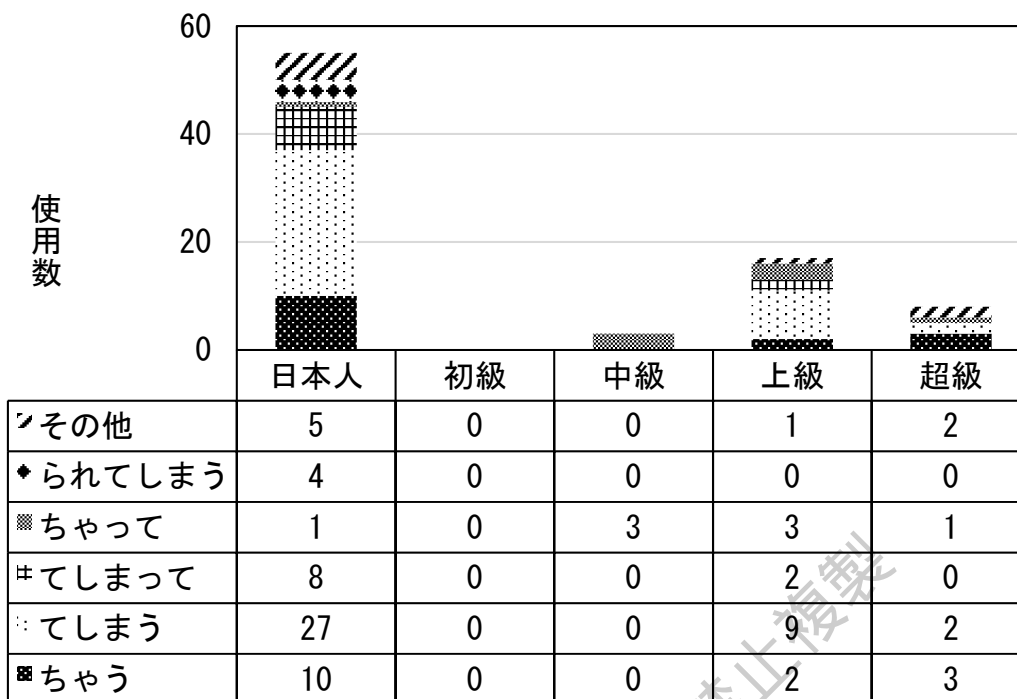


図 1 英語話者によるテシマウの非過去形の形式

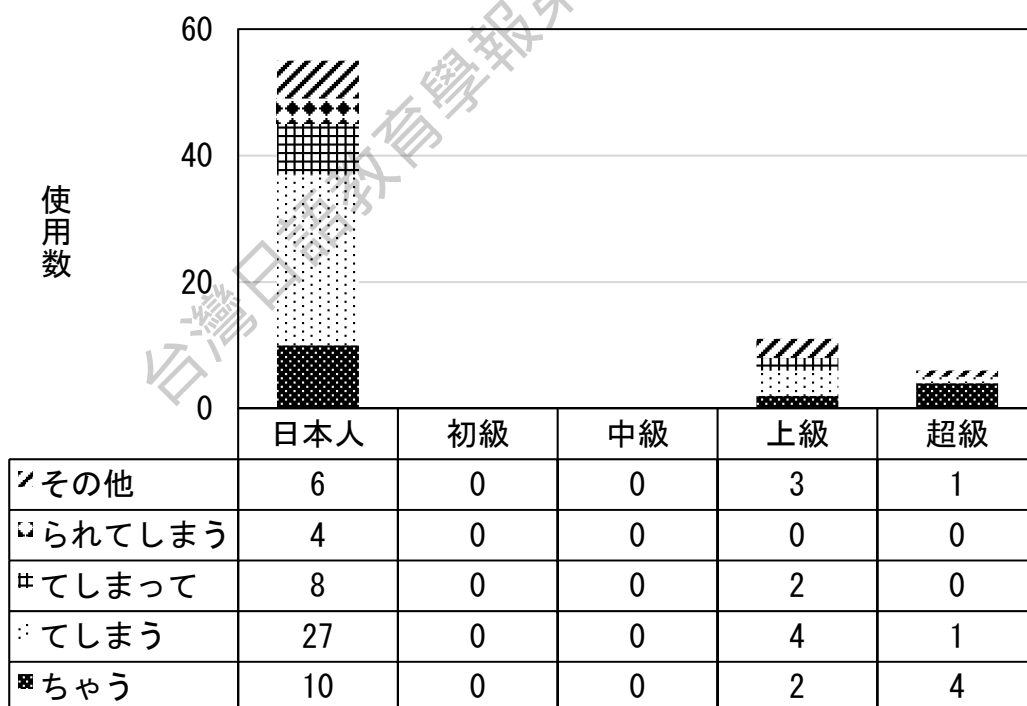


図 2 中国語話者によるテシマウの非過去形の形式

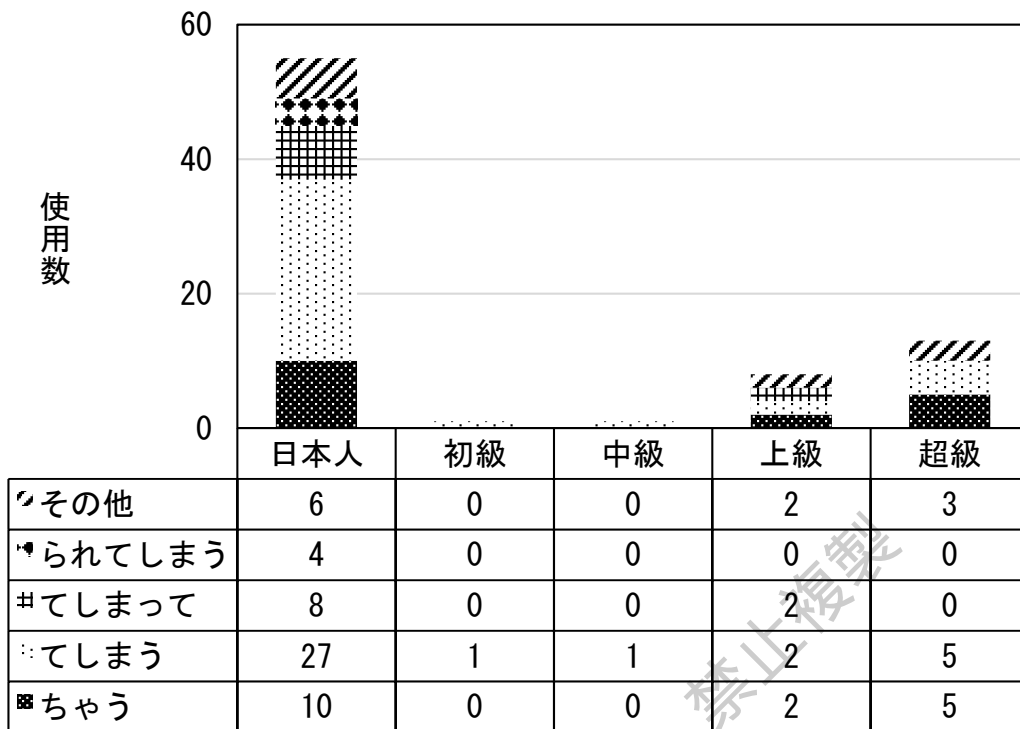


図3 韓国語話者によるテシマウの非過去形の形式

そして、日本語学習者によるテシマウの非過去形の使用状況を見ると、全体的に学習者間の母語の違いに関わらず、初級と中級に産出が少なく、上級に上がってから急に多く増加し、その中で、特に(4)と(5)に示したような「てしまう」と「ちゃう」の産出回数は、ほかの非過去形の形より多いことが観察された。また、「てしまう」と「ちゃう」の使用状況について、母語の異なる学習者で個別性が見られた。英語と中国語話者では、「てしまう」の産出が上級から大幅に増加し、「ちゃう」の産出が超級に上がってから増加する一方、韓国語話者では、「てしまう」と「ちゃう」の産出が超級から数多く観察された。

- (4) たまにもう少し、あのまあ、これちょっとアメリカ的な考えなんですけれども、もう少し自分のことを、ちょっと考えてちょうだいと言いたく一なってしまうんですよね、はい、あのーバランスが大事だと思うんです。 (被験者 EAH06)

(5) でも運動後のタバコは体によくないんじゃないんですか、ほら、肺活一量、ほら、はい、呼吸が速くなるんじゃない、それで、その煙りがすみずみまで、肺のすみずみまで入っちゃうでしょ。(被験者 CS04)

(6) 日本のことって言うか、そういう、任天堂は、日本の会社で、あの、アメリカ人、知ってる人もいるし、知らない人が多いと思うんですよね、ただのゲームメーカーでしょ、それを、ばっかりやっていて、あの、そういう、あの、影響をずっと、受けてきたというか、という、あの、言葉にしちゃって、そういう、任天堂キッズというふうに呼ばれてるんですけども。(被験者 EAH02)

母語話者が3番目に数多く使用している「てしまつて」に関して、学習者には産出回数が少なく、各学習者グループでは2回ずつのみ使っていることが分かった。しかしながら、特に注目されるのは、学習者による「てしまつて」の産出回数が少なかったが、英語母語話者には(6)に示したような「てしまつて」の縮約形である「ちゃつて」の産出回数が多いことが観察された。このことは、調査対象となる学習者の用例が自然発話コーパスから抽出されたものであるため、話し言葉的な「ちゃつて」は書き言葉的な「てしまつて」より数多く使用されている可能性がある。

以上の結果から、日本語学習者によるテシマウ正用の使用に関して、母語の異なる学習者で普遍性と個別性が見られた。英語と中国語話者では、上級からテシマウの産出回数が急に増加してきて、「てしまう」と「ちゃう」という2つの形を中心に非過去形で数多く使用している。一方、韓国語話者では、「てしまう」と「ちゃう」の産出が超級から多く観察された。

4.2 誤用の形と分布

調査結果からテシマウの誤用のパターン、用法、定義、及び使用例を表3のようにまとめた。なお、便宜上、以下ではテシマウの誤

用のパターンを表3に示したように称する。以下では表3に基づき、誤用の変化と推移を観察し、被験者の使用例を引用しながら考察していく。

表3 テシマウの誤用の形、呼称及び定義

	呼称	定義と被験者の使用例
誤用	タ→誤用の テシマウ	「た」を使用すべき箇所に、「てしまった／てしまいました／ちゃった」を使用した誤用。 ----- 例：はやり年とってきて、体によくないらしいんで、それやはり* <u>止めちゃった(止めました)</u> 。 今もう全然(タバコ)を吸いまん。 (被験者 CS04)
	ル→誤用の テシマウ	「て／する」を使用すべき箇所に、「てしまつて／てしまふ」を使用した誤用。 ----- 例：あの母親は、離婚して、あの、今、新しいボーイフレンドと住んでいますが、あのー、父親も、一般的なアメリカの家族かもしれませんが、あの、父親もまた* <u>結婚してしまひまして(結婚して)</u> 、今、そうですね、3人で住んでいますが。 (被験者 EA01)
	その他の過 剰使用	上記以外の形式を使用すべき箇所にテシマウを過剰に使用した誤用であり、それぞれの使用頻度が2回以下であるもの。 ----- 例：T：それで、自転車いや自動車はどうになりましたか。 S：うん、自動車は、あーだいじょうぶですけど、自転車、自転車に乗っていた人が今、どろの上に倒れて、うん、動けません。

		<p>T : えーと自転車はどうなっていますか</p> <p>S : 自転車は、ハンドル、ハンドルの方が、 *壊れてしまいました。</p> <p>(被験者 KIM04)</p>
	その他の過少使用	<p>テシマウを使用すべき箇所に、上記以外の形式を使用した誤用であり、それぞれの使用頻度が2回以下であるもの。</p>
		<p>例：両親がやはり兄弟とかいますとー、英語で話してしまうんで、あのなかなか日本語の勉強とかは、あと日本語の話す機会が*少なくなつて、います (少なくなってしまうと思います)。</p> <p>(被験者 ES01)</p>

※* は被験者の誤用で、() は筆者が訂正したものである。

また、全被験者によるテシマウの誤用、産出回数と比率を日本語レベル別にまとめると、表4の通りである。

表4 被験者によるテシマウの誤用産出回数と比率

	初級	中級	上級	超級	合計
タ→誤用のテシマウ	0	4	4	5	13(59.1%)
ル→誤用のテシマウ	0	0	3	1	4(18.1%)
その他の過剰使用	0	2	1	0	3(13.6%)
その他の過少使用	0	0	1	1	2(9.0%)
合計	0	6	9	7	22

※%はテシマウの誤用産出回数合計を母数とする比率である。

表4から学習者の誤用は中級から「タ→誤用のテシマウ」に集中しており、超級に上がっても数多く残っており、誤用全体の59.1%を占めていることが観察された。この結果は丸谷他(1998)と砂川

(2017)の研究結果に沿っているものである。(7)は学習者による誤用例で、「タバコを止めた」という出来事を単なる事実として述べるべきところに、「感情・評価的な意味」のテシマウを使ったことによる誤用である。テシマウは「た」と同じく「事態の完了」という意味を表すが、事態の完了を強調するとともに、それに伴う発話者のさまざまな気持ちも表している(丸谷他 1998:122)。学習者は「た」とテシマウの機能が混同の中で、テシマウを過剰一般している可能性がある。

(7) はやり年とってきて、体によくないらしいんで、それやはり
*止めちゃった (止めました)。今もう全然 (タバコ) を吸い
まん。(被験者 CS04)

4.3 テシマウの「感情・評価的な意味」と話者の関係

テシマウの表す感情・評価的な意味は「話者」にとってのものであり(梁井 2009)、テシマウが帯びる話者の感情・評価的な意味がマイナスになるかどうかは、話者自身による意志的な動作か否かに左右されうると報告されている(金水 2004)。そこで、本節では、テシマウの「感情・評価的な意味」と話者の関係に注目し、日本語学習者によるテシマウの使用状況を検討していく。表5～表8はこうした観点から日本語話者と日本語学習者の用例を分類したものである。表5～表8では、3.3分析手順で述べたように、梁井(2009:23)の分析方法を参考にして、話者が動作主と一致する「話者＝動作主」と、一致しない「話者≠動作主」に分けた上、吉川(1974)の定義により動詞を話者自身の意志に基づく「意志動詞」と、意志に基づかない「無意志動詞」に分類した。その後、マイナスの「感情・評価的な意味」が明らかに読み取れる場合は「-」、それ以外は「+」とした。

表 5 日本語話者によるテシマウの感情評価的意味と話者の関係

	話者 = 動作主				話者 ≠ 動作主				合計
	意志動詞		無意志動詞		意志動詞		無意志動詞		
	+	-	+	-	+	-	+	-	
合計	6	12	2	9	2	16	6	11	64

表 6 英語話者によるテシマウの感情評価的意味と話者の関係

	話者 = 動作主				話者 ≠ 動作主				合計
	意志動詞		無意志動詞		意志動詞		無意志動詞		
	+	-	+	-	+	-	+	-	
中級	0	0	0	3	0	1	0	0	4
上級	0	4	0	3	1	11	0	5	24
超級	0	2	0	0	0	3	1	4	10
合計	0	6	0	6	1	15	1	9	38

表 7 中国語話者によるテシマウの感情評価的意味と話者の関係

	話者 = 動作主				話者 ≠ 動作主				合計
	意志動詞		無意志動詞		意志動詞		無意志動詞		
	+	-	+	-	+	-	+	-	
中級	0	0	0	0	1	0	0	0	1
上級	0	1	1	2	0	3	0	7	14
超級	0	0	0	0	0	3	0	3	6
合計	0	1	1	2	1	6	0	10	21

表 8 韓国語話者によるテシマウの感情評価的意味と話者の関係

	話者 = 動作主				話者 ≠ 動作主				合計
	意志動詞		無意志動詞		意志動詞		無意志動詞		
	+	-	+	-	+	-	+	-	
初級	0	0	0	1	0	0	0	0	1

中級	0	0	0	0	0	1	0	0	1
上級	0	2	0	2	0	3	0	1	8
超級	1	1	1	2	0	6	0	3	13
合計	1	3	1	5	0	10	0	4	24

表 5～表 8 から以下の特徴が観察された。まず、テシマウの感情評価的意味と話者の関係について、異なった言語を母語とする学習者の間で普遍性が見られ、テシマウの産出が日本語母語話者と同様で主に「話者≠動作主」に集中しており、しかも意志的な動作であるかどうかに関係なく、感情評価的な意味はマイナスになる傾向があった。話者が動作主と一致しない場合、「即ち、話し手以外の人やものの出来事、あるいは自分の意志によらない話し手の出来事といった、話し手の意志ではコントロールできない事態が生起したときに、マイナスの感情評価的な意味が生じやすい」と報告されている（砂川 2017:493；杉山 1991,1992；梁井 2009）。日本語学習者の使用状況は先行研究の指摘に沿っていると言える。(8)～(10)は学習者による「話者≠動作主」の使用例である。「その集団もともとの良さは失う」、「みんなからいじめられる」、「鈍感になる」という出来事は話者自分の意志によるものではなく、話者の意志でコントロールできない事態であり、テシマウはマイナスの感情評価的な意味として用いられている。

(8) 要するに、個性を重視する人間としての個性を重視しないといけない、ただ日本は、集団社会としてずーっとこういうふうにやってきたんですから、あの一、その、個性を重視すればその集団もともとのよさ、いいところはね 失ってしまったら、これからどうやって やっていけるかそのあたり私もよくわかんない本当にあまりわかりません。

(被験者 CAH07)

(9) そうだね、でも学校には行かないとね、みに、みんな一から

余計に、こう、いじめられちゃうよ。(被験者 KAH04)

- (10) 任天堂キッズていうふうに言ってるんですね、で、任天堂キッズは、どういう、キッズか、っていえば、なんか、その、なんていう あの、刺激がないと、あんまり感じないっていうか、もう刺激が多すぎて、もう鈍感になっちゃってるで、わがまま。(被験者 EAH02)

次に、「話者≠動作主」において、意志的な動作を表す動詞がどの程度用いられるかを調べたところ、母語の異なる学習者の間で個別性が見られた。中国語話者ではマイナスの感情評価的な意味が生じるのは意志動詞より無意志動詞のほうが多いのに対して、英語と韓国語話者では意志動詞のほうが多いことが観察された。話者が動作主と一致しない場合に、中国語話者は話者自身の意志によらない事態に対して、英語と韓国語話者は話者以外の人による意図的な行動に対して、マイナスの感情評価的な意味のテシマウを使用し感情・評価的な判断・態度を表す傾向があった。(11)は中国語話者による無意志動詞の使用例である。(11)は「みんなと一緒にしてしまう」理由を述べている場面である。「日本人は目立つのが嫌で、集団に嫌われる」という話者自身の意志によらない事態に対して、テシマウを使用することにより、「つついみんなと一緒にになった」という結果にマイナスの感情・評価的な判断を下す。

- (11) みんなこういう発音してるんですから自分だけはじょうずな発音して、目立つじゃないかな、でやっぱり日本人は目立つのが嫌で、まー嫌で自分自身いやじゃなくて集団に、ね、きらわれてるんですからやっぱりつついみんなといっしょになっちゃって、で、語学教育はうまくいかないというね。(被験者 CAH07)

(12) あのーアメリカはあの確かに離婚が多くて、〈んー〉あのこ
う、結婚のことをあんまり考えないで、すぐにこう、結婚
してしまって。 (被験者 EAH06)

(12) は英語話者による意志動詞の使用例で、「アメリカは離婚が多い」ことについて語っている場面である。「結婚のことをあまり考えないで、すぐに結婚する」という話し手以外の人による意図的な行動に対して、テシマウを使用してマイナスの感情・評価的な態度を示す。

また、「話者＝動作主」に関して、すべてのグループにおいて、産出回数は全体的に「話者≠動作主」より少なかったが、「話者≠動作主」の使用傾向と同じく感情評価的な意味は意志的な動詞かどうかに関係なく、マイナスになる傾向が観察された。特に注目されるのは、中国語話者において、「話者＝動作主」の産出は他の学習者に比べ、数が少なかったことである。中国語話者によるテシマウ産出は主に「話者≠動作主」に集中しており、話者自身の意志に基づく行動ではなく、話者の意志と全く無関係に生じた事態を中心に、マイナスの感情評価的なテシマウを使用する傾向が顕著である。

以上のことから、テシマウの感情評価的意味と話者の関わりについて、異なった言語を母語とする学習者の間で普遍性が見られ、テシマウの産出が「話者≠動作主」に集中しており、感情評価的な意味はマイナスになる傾向があった。一方、母語の違う学習者の間で個別性も見られた。話者自身の意志による事態か否かにより、意志動詞と無意志動詞の使い分けが観察された。

5. 結論

本稿では、日本語学習者発話コーパス「KY コーパス」を用い、テシマウの習得過程と学習者の中間言語は日本語レベルと母語の違いに応じて共通性と個別性があるか、話者、動作主と前接動詞の意志性の3つにより使用状況に相違点が見られるか、日本語話者と比較

しながら検討を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

まず、正用の形に関して、母語の異なる学習者で普遍性と個別性が見られた。英語と中国語話者では、上級からテシマウの産出回数が急に増加して出し、「てしまう」と「ちゃう」という2つの形を中心に非過去形で数多く使用している。一方、韓国語話者では、「てしまう」と「ちゃう」の産出が超級から多く観察された。

次に、誤用の形に関して、全体的に「タ→誤用のテシマウ」に集中しており、超級に上がっても数多く残っていることが観察された。この誤用が引き起こされる原因として、テシマウと「た」の機能が混同され、テシマウを過剰に一般化している可能性が挙げられる。

そして、テシマウの感情評価的意味と話者の関わりについて、異なった言語を母語とする学習者の間で普遍性が観察された。テシマウの産出が主に「話者≠動作主」に集中しており、感情評価的な意味はマイナスになる傾向があった。一方、母語の違う学習者の間で個別性も見られた。話者自身の意志による事態か否かにより、意志動詞と無意志動詞の使い分けが見られる。

参考文献

- 庵功雄、松岡弘、中西久実子、山田敏弘、高梨信乃（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・清水佳子（2003）『時間を表す表現-テンス・アスペクト』スリーエーネットワーク
- 一色舞子（2011）「日本語の補助動詞「～てしまう」の文法化：主観化、間主観化を中心に」『日本研究』15, 201-221.
- 鎌田修（2006）「KY コーパスと日本語教育研究」『日本語教育』130, 42-51.
- 川口義一（2005）「日本語教科書における「会話」とは何か：ある「本文会話」批判」『早稲田大学日本語教育研究』6, 1-13.
- 金水敏（2000）『時の表現』金水敏・工藤真由美・沼田善子（共著）『時・

- 否定と取り立て』岩波書店
- 江田すみれ・小西円 (2008) 「3種類のコーパスを用いた3級4級文法項目の使用頻度調査とその考察」『日本女子大学紀要・文学部』57, 1-28.
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』東京：アルク.
- 杉本武 (1991) 「「てしまう」におけるアスペクトとモダリティ」『九州工業大学情報工学部紀要・人文・社会科学篇』4, 109-126.
- 杉本武 (1992) 「「てしまう」におけるアスペクトとモダリティ(2)」『九州工業大学情報工学部紀要・人文・社会科学篇』5, 61-73.
- 砂川有里子 (2018) 「中級以降で指導が必要なシテシマウの用法について—学習者と母語話者の使用状況調査に基づく考察—」『形式語研究の現在』藤田保幸・山崎誠編 『形式語研究の現在』和泉書院, 479-499.
- 高橋太郎 (1969) 「すがたともくろみ」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, 119-153.
- 棚橋明美 (1996) 「英語を母語とする日本語学習者による「～てしまう」の使用について」『言語文化と日本語教育』12, 24-33.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』東京：くろしお出版.
- 中山富子 (2013) 「コーパスに基づく補助動詞の考察—意志動詞及び無意志動詞とのかかわり」『言語文化教育』8, 34-37.
- 中山富子 (2015) 「補助動詞「～てしまう」の考察：談話の構造に注目して」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』10, 1-19.
- 丸谷しのぶ・和栗雅子・寺内弘子・菊池周子・法貴則子・梅岡己香 (1998) 「「てしまう」はどのような表現か—その「心理側面」について—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』24, 119-131.
- 宮部真由美 (2018) 「中級・上級レベルの日本語に見られるシテシマウ—意見と説明を述べるテキストの用例を中心に」『日本語／日

本語教育研究』9, 39-55.

森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店

森山卓郎(1984)「アスペクトの意味の決まり方について」『日本語学』3, 70-84

守屋三千代(1994)「「シテシマウ」の記述に関する一考察」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』6, 49-70.

梁井久江(2009)「テシマウ相当形式の意味機能拡張」『日本語の研究』5-1, 15-30.

山内博之(2009)『プロフィシェンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房.

吉川武時(1973)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, 155-327.

吉川武時(1974)「日本語の動詞に関する一考察」『日本語学論集』1, 67 - 76

台灣日本語教育學報第33號 禁止複製